太宰管内志

肥前之五

松浦郡中

二七五三番

和書門 類
二九六〇一 號
二二 函
八二 冊
八 架

内閣文庫
和 書 類
二九六〇一 號
八二 冊
七 架
一七六 函

内閣文庫
番號 和 29601
冊數 82（5）
函號 176 44

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

太宰管内志

肥前之五　松浦郡中

筑前人伊藤常足編録

○松浦川

神功皇后紀ニ元年四月甲辰北到火前國松浦縣而進食於玉島里小河之側於是皇后勾針為鈎取粒為餌抽取裳糸為緡登河中石上而投鈎祈之曰朕西欲求財國若有成事者河魚飲鈎因以挙竿乃獲細鱗魚時皇后曰希見物也（希見此云梅豆邏志）故時人号其處曰梅豆邏國今謂松浦訛焉是以其國女人毎當四月上旬以鈎投河中捕年魚於今不絶唯男夫雖鈎以不能獲魚（万葉集五巻筑前守山上憶良主松浦まて讀るゝる哥よ多良志比賣可尾鈷美許等鈷奈都良須等美多

多志世利斯伊
志遠多礼義吉

万葉集五巻に遊於松浦河序。余以暫往松浦之縣道遥。聊臨玉島之潭遊覧。忽値釣魚女子等也。花容無雙。光儀無匹。開柳葉於眉中。發桃花於頬上。意氣凌雲。風流絶倫。僕問曰誰郷誰家児等若疑神仙者乎。娘等皆咲答曰児等者漁夫之舎児草菴之微者無郷無家何足称云唯性便水復心樂山或臨洛浦而徒羨玉魚作臥巫峡以空望烟霞今以邂逅相遇貴客不勝感應輙陳欵曲而今而後豈可非偕老哉下官對曰唯唯敬奉芳命于時日落山西。驪馬将去。遂申懐抱。因贈詠歌曰。

阿佐里須流阿末能古等母等比得波伊倍騰美流爾之良延奴有麻必等能古等

荅待曰

多麻之末能許能可波加美尓伊返波阿禮騰吉美乎夜佐之美阿良波佐受阿利吉

蓬容等更贈歌三首 三首の内中の一首ハ玉島の件ニ引出きでおいよもはぶきつ

麻都良河波可波能世比可利阿由都流等多多勢流伊毛河毛能須蘇奴例奴

等富都比等末都良能加波尓和可由都流伊毛我多毛等手和礼許曽末加米

娘等更報歌三首

和可由都流麻都良能可波能可波奈美能奈美迩之毋

波婆和礼故飛米夜毋

波流佐礼婆和伎覇能佐刀能加波度尓波阿由故佐婆

斯留吉美麻知我豆尓

麻都良河波奈奈勢能与騰波与等武等毛和礼波与騰

麻受吉美遠志麻多武

後人追和之詩三首都帥老 三首の内後の二首ハ玉島ノ件ニ引出とぞあり、よい省きつ

宜啓伏奉四月六日賜書跪開對函幹讀芳藻心神開朗似懐

奉(泰カ)初之月鄙懐除私若披樂廣之天至若覊旅辺城懐古舊而

傷志年矢不停憶平生而落涙但達人安排君子無悶伏冀朝

宣懐翟之化暮存放亀之術架張趨於百代追松喬於千齡耳

兼奉垂示梅花芳席群英摛藻松浦玉潭仙媛贈答類杏檀各

言之作疑衡皇稅駕之篇耽讀吟諷戚謝歓怡宜戀主之誠誠

逾犬馬仰德之心心同葵藿而碧海分地白雲隔天徒積傾延

何慰労緒孟秋膺節伏願萬祐日新今因相撲部領使謹付片

紙宜謹啓不次云云和松浦仙媛歌一首

伎彌乎麻都麻都良乃于良能越等賣良波等己与能久

尓能阿麻越等賣可忘

六家集拾遺よ

命たに有らば逢瀬なと松浦河返らぬ浪も淀めとぞ思ふ

夫木集に行詮

松浦河年魚つる瀬々の水清ミ濁らぬ末に早苗取なり

豊臣勝俊九州の道の記に玉島川松浦川いつれをやがて海に流出て侍る松浦川ハ七瀬の淀とも見ゆるにあらいどいと大きなる川にてぞありける彼松浦さよひめがひきぬふりしより名にいはれけむ山もけ近き所に見えしていとおかしきうらなりなど見えたり

名處方角抄に松浦川又鏡渡ともいふ栗屋川とも世俗にはまをとあるハ別川なりまがふべし此二川の間東西一里余もあるべし

青柳大人云松浦川の水源二ッあり玉島の神功皇后社の上にて合て一ッとなるかくして其南方より流来る水ハ平原村の山中よりいで東方より流来る水ハ七山よりいづるなりと

七山と云ハ深谷の中にして幽邃の渓七ッありて人家なども多し

此里の婦人ども四月になれば年魚をつると云事古書ども多く見えたれど今ハきこえずさて此河の年魚他に異にして口に金絲を纏ふ味あるなるそうらし川ハ大河にてあらじ其下流ハ濱崎駅の東に出て海に入る

濱崎より南玉島に一里ばかり筑前國怡土郡深江駅より西三里余にして肥前濱崎の驛あり

常足云松浦川とあるからは玉島里を流るるに因て玉島河とも云

さりとも玉島件にも聊いづるをもてさらに合せてさるべし

土人の傳に此河中昔まては玉島のそこし北より西にそれて濱崎又虹ノ松原と鏡山との間を流れて唐津城の東水島の辺にて鏡川に合て

海に入たりし故中古に今ノ濱崎ノ駅の東を堀て玉島より直
く北に流せし物なりと云此傳説さもあるべし土地の様
もさる思はるゝ處なり　鏡山又鏡ノ社のあたりを古のふかゝる
つはとさいへどもる時ハ古傳説さても
うるはしくめでたしされども又ありふに今の鏡山の北な
る虹ノ松原と云えれはいとく後に沖津風の沙を吹あげて
なれる所にて古代の事などあずかりしに引出づる事に
こはしからざる由ありさてこれを鏡川と一ッになりて海にいると
云ふかりの事にもあらじされども濱崎
の東を堀まりといふに妨あることなし

○篠原村

肥前風土記に松浦縣云云於是篠原村（篠ハ資農也）有娘子名曰乙
等比賣容貌端正孤為國色紗手比古便娉成婚云云とあり
已上万葉集仙覚抄に見えたり　篠原ハ志奴波良とよむべしと古事記中巻に阿佐士怒
波良（ましく太平記に越中國篠原などもみえしかり）同風土記（今本に）弟日姫子与狭手彦
連相分経五日之後有人毎夜来与婦共寝至暁早帰容止形
貌似狭手彦婦抱其恠不得忍默竊用績麻繋其人襴随麻尋
往此峰頭之沼辺有寝蛇身人而沉沼底頭蛇而臥沼壅忽化
為人即語云志努波羅能意登比賣能古素云云などみえしる
て名義ハ篠の多く立てる處なるべし　さて此篠原の事ハ師
考に鏡村の西に梶原又原など云處あり此處なるべしと
云をれるハさもあるべし（郡南五六里に笹原と云所ありといへどそれにもあらじぞ）
るべし

○玉島

古事記中巻（神功皇后の件）に　到坐竺紫末羅之玉島里而御食其河辺之時。當四月之上旬尓坐其河中之礒抜取御裳之糸以飯粒為餌釣其河之年魚（其河名謂小河亦其礒名謂勝門比賣也）故四月上旬之時女人抜裳糸以粒為餌釣年魚至于今不絶也（神功皇后紀に元年四月甲辰北到火前國松浦縣而進食於玉島里小河之側於是皇后勾針為鈎取粒為餌抽取裳糸為緡登河中石上而投鈎祈之曰朕西欲求財國若有成事者河魚飲鈎因以挙竿乃獲細鱗魚時皇后曰希見物也云云風土記に昔者息長足姫尊欲征伐新羅行於此郡而進食於玉島小河之側於玆皇后云云）とあり　玉嶋は多麻志麻とよむべし。名義は古に玉など出たりし所なるべし（土佐國風土記に吾川郡玉島或説曰神功皇后巡国之時御船泊之皇后下島休息礒際得一白石圓如鶏卵皇后安于御掌光明四出皇后大喜詔左右曰是海神所賜白真珠也故以為島名と云事も見えたり。又残冊風土記に陸奥國名取郡玉島神社又玉島川といふも見えたり。又備中國にも玉島といふ所あり）かくて万葉集五巻に（遊於松浦河序）余以暫往松浦之縣逍遥聊臨玉島之潭遊覧云云　荅待曰（是は仙媛の荅なり此件の事全文も松浦川の件に引出るれは今は省きぬ引て彼件を考ふべし）

多麻之末能許能可波加美爾伊返波阿禮騰吉美乎夜佐之美阿良波佐受阿利吉

蓬容等更贈歌三首のうち

麻都良奈流多麻之麻河波尓阿由都流等多多世流古良何伊弊遅斯良受毛

後人追和之詩三首のうち　都帥老

比等未奈能美良武麻都良能多麻志末乎美受弖也和

礼波故飛都々遠良武

麻都良河波多麻斯麻能有良尓和可由都流伊毛良遠

美良牟比等能等母斯佐

續千載集に定家卿

梅が香や先移るらむ影清き玉島河の水のかゞみに

風雅集に家隆卿

玉島や落来る年魚の河柳下葉うちちる秋風ぞ吹く

新續古今集に順徳院

玉島や河瀬の浪の音はして霞に浮ふ春のつきかげ

新千載集に前権僧正雲雅

玉島や夕浪高く成にけてこの河上にあゆしふくらし

名處方角抄に肥前國玉島河は皇后の金魚釣給ふ河なり

あがり給ふ石今に是あり此石より三町ばかりは今も鮎

をつるなり此河は草野大村と云處なりなど見えたり

百首哥に國冬・をとめ子が此河上の家づとは玉島櫻たをりてゆくなり・新續今集に弾正尹忠房親王・まつら山夕越くきて玉嶋の里のつゞきはうら煙かな・六家集に参議・ひかりさし玉島河の月清きかもとめ衣袖さえぞ照る・類題集に・

若菜つむをとめが袖も玉島の春の

ひかりに匂ふ川なみ・たゞしもあり

常足云松浦郡玉島里

南の岡に神功皇后社あり 東に向へて拝殿神殿あり 此社則玉島河に

望めり此社に登る石階の下に道あり 濱崎方より佐嘉郡河上社に到る近道

あり是より河上に七里あり旅人なども通るところにて常に行来のたえぬみちなり 道東にそひ

て玉島河流る此辺河中に神功皇后の上り玉ひし石と云物近ごろまでありしを今は沙に埋もれたりし由いへり人家は河の東西山の麓をとりまけり（彼社も人家の際にあり）書紀通證に玉島河岸有大石方七尺許俗名紫石傳云皇后垂釣之處。柳園随筆に玉島神功皇后の社前に河中大石あり其形凡櫃の如くにして紫色なり是皇后の釣志めしたまふ石にして常は河中の沙に埋もれて見えず時として河瀬のかはる事あきをいづといへり毎年八月十五日に祭あり唐津の殿より代参使あり其時石のある上に高札をたてて皇后の釣志めひたる地なる由を記せりといふ。玉島より半里余北に流

きく濱崎ノ駅の東の渡口（船渡なり）より海にいる潮満る時は渡口より十町ばかりは船ものぼるべし其より上は山川にて水も多からしぞ是則初に上げたる松浦川なる玉島ノ里はひなびたるやうなれど山川のさま世にめづらしく人家も打ちらかりてされど其造ざま甚うるはしくしていひしらぞ面白き處なり（玉島より鏡ノ里へ一里ばかりもあるべし筑前国怡土郡をとおりて肥前國長崎のうつまりたる官道の筋より左ノ方に近く見ゆる處なれど心なしむ人はかゝらば立よりてみるべきなり。）さて古事記に勝門比賣とあるは加知騰比咩とよむべし加知は戦に勝ことにて三韓御征伐の事をうけいはれし處にて負せたるなどにや門は両岸門の如くなるによりたるなるべし比賣は其土地のさまの雌雄をとりてしくできおとものれあるによられるなるべし山などの名に男女をえてあけたるいこときうしる例多き事なり（元禄圖に松

浦郡王島村あり

○殿原寺

公文に寶蓮花院政所下鏡宮神宮寺僧等定補殿原寺座主職事右件職者僧義覚先達之相傳所職也而受重病之刻妹藤津氏女讓賜多年領掌無相違而男子藤井貞重孝養之志甚深之間相具手継證文讓給〔図〕爰僧源實号義覚門弟指不帯契状致妨云云如此所職以手継相傳為先縦(蹤)雖帯本文公無契状者不可為證文早任手継相傳之旨貞重令領掌有限佛神事已下公事無懈怠可令勤仕之状如件者神官寺僧宜承知勿遺失故下貞應元年六月日上座法橋上人位書判寺主大法師書判都維那大法師・公文法師豪舜とあり 上の三人にいつる公文法師の名はきくかけり 殿原寺は松浦平原村にあり此公文は彼寺に傳はりし殿原と云は本地名なとに依れる寺号にや宗旨事なといまだ考へず 近来の松浦古来略傳記と云物にも此寺号は見えず

○逢鹿驛

風土記に松浦郡逢鹿驛在郡西北 曩者氣長足姫尊欲征伐新羅行幸時於此道路有鹿遇之因名遇鹿驛駅東海有蛇螺鮑雑魚海藻海松等・又延喜式に肥前國逢鹿駅あり逢鹿は阿布加とよむべし 和名抄に伊勢國多気郡相可は阿布加と云もあり・又同郡に相鹿上神社を式に見えたり 又和名抄に常陸國行方郡逢鹿といふもみえしなり さて柳園随筆に松浦郡逢鹿驛

と云は今唐津城より西北二里ばかりに相賀浦ともある
是なり鞆浦と同じつゞきの海辺なり今もアフカといへ
りと見えたり。元禄図に松浦郡相賀村あり

○登望驛

延喜式に肥前國登望驛あり。登望は寺毛とよむべし。名義
は風土記に松浦郡登望驛（在郡西）昔者氣長足姫尊到於此處
留為雄装御負之鞆落於此村因号鞆駅駅東西之海有蛇螺
雜魚海藻海松等とあり。柳園随筆に松浦郡登望駅と云は
呼子の東の海口に大伴浦小伴浦とて此所なるべしと見
えたり

○柏島亭

万葉集十五巻に天平八年丙子夏六月遣新羅國之時使人
等之云肥前國松浦郡柏島（本は柏島とあるらし）亭船泊之夜遥望海
浪各慟旅心作歌七首

可敝里伎弖見牟等於毛比之和我夜度能安伎波疑須
須伎知里尓家武可聞

右一首秦田麿

安米都知能可未乎許比都々安礼麻多武波夜伎万世
伎美麻多婆久流思母

右一首娘子

伎美乎於毛比安我古非萬久波安良多麻乃多都追奇
其等尓与久流日毛安良自
秋夜乎奈我美尓可安良武奈曽許己波伊能祢良要奴
毛比弖里奴礼婆可
多良思比賣御舶波弖家牟松浦乃宇美伊母我麻都敝
伎月者倍尓都々
多婢奈礼婆於毛比多要弖毛安里都礼杼伊敝尓安流
伊毛之於母比我奈思母
安思比奇能山等妣古由留可里我祢婆美也故尓由加
波伊毛尓安比弖許祢

延喜式に肥前國柏島牛牧などあり又松浦古来略傳記に神集島津守侍二人無足五人又扶桑紀勝五巻に松浦郡柏島の圖を載せあり其説に人家の前に入海あり其處の船泊のために石堤をつきめぐらしあり民俗傳て云神功皇后新羅を討給ふ時此堤をつくりて兵船を集給へり近代秀吉公名古屋に下給ひし時すべて神功皇后の跡をおひて此處の石堤なども修補ありしなりといふ又地圖に松浦郡呼子より東北の方に神集島あり

○大沼郷

和名抄に松浦郡大沼（於保奴）あり名義は沼のある處にて負

せらるべし又ハ大野の意なるか。元禄に松浦郡大野村あ
て是なるべし大沼といふ處今ハきこえしで（大野村と云との二處にえし）
（ありいづもなりしむ方角等の事ハいまだうかゞひえず）

○生佐郷

和名抄に松浦郡生佐（伊岐佐）あり。名義いまだ考へず（東鑑三十六巻に松浦郡壹岐泊といふと見ゆ）さて松浦古来略傳記に八並武蔵守泰吉
慶伊吉佐村三百石。寛知集に松浦郡伊岐佐村あり。又扶桑
紀勝五巻に松浦郡（唐津領）伊岐佐村に大瀧あり高さ二十丈
許ありて肥後の半田瀧を四ツならべ重上たらむが如し流
のさまハ半田よりとわそし此瀧すぐれて見事なり唐津

南三里にして長崎へゆく道の徳末より南一里半にあり
と見えたり

○久利郷

和名抄に松浦郡久利あり。久利ハ倶理とよむべし。名義を
粟に由ありて負せたるか（舊事紀七巻に豊門別命ハ粟ノ首ノ祖としあるもこしの久利に由ある事にそあらぬなどか考ふべし）さて風土記また童蒙抄に粟川とあるハ此
久利郷の川の事にて鏡ノ渡と云ハ此川の内の一處をさし
て云名なり。柳園随筆に粟川ハ藪ノ渡とて鏡村より一里南
に徒渉の地あり其東岸の人家を今も久里村といふ和名
抄に久利郷とあるハ是なり

○各羅(カラ)島

雄略天皇紀ニ二年七月百濟池津媛違天皇将幸婬於石河楯天皇大怒詔大伴室屋大連使来目部張夫婦四支於木置假床上以火燒死云云五年四月百濟加須利君飛聞池津媛之燔殺而籌議曰昔貢女人為釆女而既無礼失我國名自今已後不合貢女乃告其弟軍君曰汝宜往日本以事天皇軍君對曰上君命不可奉違願賜君婦而後奉遣加須利君則以孕婦既嫁与軍君曰我之孕婦既當産月若於路産冀載一船随至何處速令送國遂辭訣奉遣於朝六月丙戌朔孕婦果如加須利君言於筑紫各羅島産児仍名此児曰島君於是軍君即以一船送島君於國是為武寧王百濟人呼此島曰主島(ニリムシマ)也とあり各羅ハ加加良とよむべし（各をカヽとよむハカクのクをカヽ轉しなるにて古ニ此例多し和名抄ニ美濃國各務ハ加加美とあるなどこれなり）名義いまだ考へず。さて松浦古来略傳記ニ加唐島津守無足二人足軽二人。九郎圖ニ呼子浦の北ニカヾラ島あり。師云松浦郡呼子浦の北海上三里ニ加唐島あり（人家あり）筑前比賣島ニ近し是より壹岐島まではハ七里許もあるべし是かの武寧王が生まし各羅島なる歴しといはれき（さるを谷川氏が和名抄ニ筑前國志摩郡韓良志麻云云とあるによりて各羅島を筑前の島郡なりしともして引出られどくはしからず）さて主をニリムと書紀ニよませたるハ蠻語(カラコトバ)と聞ゆ。ある書ニ肥前沖ニ二神島と云

が有レ由いへるも此島ノ名を傳誤りたるものなるべし。元禄圖に松浦郡加々良島長三十一町横三町十二間とあり大船などのかゝる處なるべし。圖にかしら島の西南に近く松島あり長十五町横三町十二間あり又東ノ方に小川嶋あり長廿四町十二間横四町是より唐津に五里なり土地のさま今少し委く考へて記しおかまほし

○小豆大島

海東諸國記圖に小豆大島五島州とつらねあげたり。小豆も阿豆支とよむべし。名義は島の形などよりて負せたるにや。さて道中行程細見記に平戸の北三里にアツキノ大島と云物をのせたり。元禄圖にも松島郡大島ノ内小豆村あり

宮嵜ノ宮観應二年の古文書に松浦ノ小豆弥五郎とあるは此所の人と聞えたり。又おもふに古事記上巻に云云還坐之時生ニ吉備兒嶋ヲ亦名謂ニ建日方別ト次生ニ小豆島ヲ亦ノ名ハ謂ニ大野手比賣ト次生ニ大島ヲ亦ノ名ハ謂ニ大多麻流別ト次生ニ女島ヲ亦ノ名ハ謂ニ天一根ト次生ニ知訶島ヲ亦名謂ニ天之忍男ト云云とある小豆島もこの嶋を云ならむか。されども吉備ノ兒島にならべてあげたるは彼わたりにあるらしく聞ゆ。なほよくかむがふべし

○大家島

風土記に松浦郡大家島在郡西 昔者纏向日代宮御宇天皇巡幸之時此村有土蜘蛛名曰大身恒拒皇命不肯降服天皇勅命誅滅自尓以来白水郎等就於此島造宅居之因曰大家郷郷南有窟有鍾乳及木蘭廻縁之海蛇螺鯛雑魚及海藻海松

多之とあり大家は於保也とよむべきか（又オホイへとも よむべし。和名抄に石見國迩摩郡大家 於保伊倍などもあり）大家今は詳ならず。元禄圖に松浦郡大光屋村又岩屋口村などある是等にてあらぬにや（又有田郷に岩屋河内村と云も見ゆれど是にてあらじ。又高来郡に大屋村と云もあれど方角たがひぬれバこれもよしなし。なほよく考ふべし）されども是は島とも聞えねバいかゞあるべき

又思ふに松浦郡大島と云物元禄圖に両處まで見ゆれど其内の一ッにてもあらむか

○賀周(カスノ)里

風土記に松浦郡賀周里（在郡北）昔者此里有土蜘蛛名曰海松橿媛纏向日代宮御宇天皇巡國之時遣陪従大屋田子（日下部君等祖也）誅滅時霞四含不見物色因曰霞里今謂賀周里訛之也

とあり。賀周は賀須とよむべし。さて元禄圖に松浦郡伊万里郷木須(キス)村あり是か又春日村と云も見ゆ是にてもあらむか方角の事はいまだ考へず（序には此郷に春日村と云があれば安閑天皇紀に火國春日部屯倉とあるはこの春日村のことなりしかともおもひなりしかど肥後國飽田郡にも春日村あり又託麻郡三宅郷と云も和名抄に見ゆれば屯倉は必肥後のことにして此国のうちにはあらじ）

○加周驛

延喜式に肥前國加周駅あり。風土記に賀周里とあると同處と聞えたり。上にも云る如く伊万里郷木須村などにてもあるべし（序に云伊万里町と云は大川野宿二里の方の海辺にして人家千軒ばかりあり此所より

伊万里焼とてやきもの〻名産を出せやく處は有田皿山とてその町より三里の方の山间にして町に持出して交易せやく所の辺の山は皆白石なりそれを堀りて山洞水に碓つがミと云物を造りて石を碎く其交易の為に諸國船多く伊万里に集まる。竜造寺隆信父有田九郎左衛门信吉は此有田に居たりし人なるか。又隆信の旗下に有田藤五と云あり藤五は後に隆信の手討にあへり。永禄十一年松浦氏伊万里千町を隆信に出して籏本となる

○斑島

懐中抄のうちに肥前國斑島（名寄にも壹岐島の内にあげたり）海人の苅る海松苫浦に白雪の斑島にも降りけるかねとあり。名義は岩などの黒白相交てまだらに見ゆるなどより負せらるべし。さて松浦古来略傳記に馬渡源太藤原久李梶山村百石馬渡島牧番無足三人足軽四人津守無足三人足軽二人。（九州治乱記岩屋合戦件に馬渡良見と云人も有り）天明九州圖に唐津領馬渡島あり。地圖に星に近く鷹島黒島牟久島と南より北に三島ならびて遥北に馬渡嶋あり鷹島二里十一町横一里四十八町黒島長五町五十間牟久嶌横六町八段とあり。柳園随筆に松浦郡斑島は苅屋星賀の沖にある島なり今も牧あり名寄にも壹岐島の内に入れたりとあり。常足が思ひられる事聊壹岐志の内に云て（斑島を松浦郡内とする時は海松）苫浦も此郡内にあるべし因て思ふに図書編肥前図に寇奴米刺とある是海松苫浦を云か。さらしむ米字下に脱字二字を落せるなるべし なほ重ても考ふべし

○松浦關

呉竹集に松浦関と云處あり是ハ昔松浦姫の住ける里の名にして関處にてあらざるなり今に松浦関と云里あり松浦に関つくるハ是なり関里ともいふべし松浦姫の哥に唐土の舟をも留ずいかなりし松浦の関乃山川のみづと見えたり松浦媛ハ乙媛の事なるべし此傳も聊わかつうかれめしなきにしもあらねどめづらしければ挙つ此松浦関と云所をし實に有しなれど彼篠原村の事なるべし

山川の水と云ハ七山より出る玉島川を云なるべし是を置て外に此辺に山川など云べき川あることなし

○松浦海

万葉集十五巻 遣新羅使の哥尓

多良思比賣御船波豆家牟松浦乃宇美伊毋我麻都敝伎月者倍尓都々

夫木集に花山院内大臣

漕出て松浦海をながめつゝ月に狎たる秋の小夜姫

名寄に後冷泉院

今も猶松浦海を見渡せど早遠ざかる船路かなしも

などゑしたり まつら新古今集に・誰としもしらぬわかれのかなしきは松浦の沖を出る舟人・新勅撰集に慈円・霞しく松浦の沖に漕出て唐土までの春を見るかな・玉吟に前大僧正道玄・松浦がた八重の汐路の秋風は唐土よりや吹初むらむ・新千載集に後鳥羽院・もろこしの山人今はをしむらむ松浦の沖のあけがたのそら・隆信朝臣・松浦がたこは世にしらぬうきねかれ袖も枕も浪はかゝつ・夫木集に観恵法師・もろこしの汐路をかゝる松浦がた

さ西に山なき月を見るかな・月清集り、ぬかな里を命あるが
と松浦がたかゝる人をし夕浪のそら・など此外にもある
べし松浦船の哥は皆此巻の初なる松浦郡ノ件にひき出あり考ふべし此郡の海は東に筑前の
諸島北に壹岐又對馬夫より西にかゝりて朝鮮の地
又南にかゝりては唐土普陀山なども見ゆる處といひ・い
にしへにやまともろこし行かひ多かりし時の道筋にあ
さまを只同しうきながらもとめなけて後世までもさそ
ちやそめれをうづくしけれど一件となして此處に擧つ

○波多島（ハタノシマ）

海東諸國記ニ源約乙亥年遣使来朝書称肥前州上松浦波
多島源約受圖書約歳遣一二船小二殿管下居波多島人丁

波多野氏出於藤原秀郷与波多氏有別

不過十餘云云源泰戊子年遣使来朝書称肥前州上松浦波
多下野守源泰以宗貞國請接待居波多有麾下兵とあり・波
多は播太とよむべし・名義は畑の意などにや（宗氏家譜に永正七年朝鮮征伐の件に畑島式部といふ人もあり）さて此波多といふは唐津ノ岸嶽を云なる
べし是波多家の城趾なり波多家の事はまでに松浦郡ノ件
の細注に松浦古来略傳記と云物を引出て論へりさるを
東鑑十巻に波多野小次郎・十八巻に波多野次郎経朝・波多
野五郎義景・廿二巻に波多野次郎朝定・波多野中務丞忠綱・
其後の軍記どもに波多野と云姓の見えあるは皆此波多
姓に野をそへてとなへつるにてなるべしされども

又後のふミども畑島と云姓の名しあるも此波多島なる
べくおもはるゝ由もあれど定めがたし。九州軍記に永禄
十一年松浦郡伊万里にて龍造寺隆信と平戸守松浦民部
太輔と戦ふ唐津城主波多尾張守俄に心がゝりして龍造
寺に与力せし故に松浦氏平戸城に引こもる。天正十二年三
月十三日肥前國畑三河守筑前國高祖城主原田下野守種
信と怡土郡に合戦せしことあり波多氏ハ関白秀吉公の
為めに領地を没収せられて子孫長く陪臣となれり。風帆
藻に唐津初ハ地切と云ひ今水島といハ同所の川向ひの市町
をいふ同所にて天正十四年三月六日松浦刑部太輔鎮信と
畑参河守と合戦の事ありて其由を尋ぬるに同年二月唐津
の浦人平戸の田平にて綱をひく田平の者ども是を平戸
に渡して刑罰す畑是を聞て安からぬ事に思ひ平戸の者
どもも此方に来らぬ事ハあらじ見合次第討捉にせよと
下知して相待所に平戸の士二十四人地切に来たりて遊
釣する所に畑が勢押かけて一々に切殺し其首に札をつ
けて水島にさらしけり此事平戸に聞えけれハ松浦大に怒て
時刻を移さず二千人を率て三月五日田平に渡り翌朝美
来屋より杉浦に渡り畑が居城に押よせ杉浦より陸路唐
津に三里三河守ハ其比畑城に居たりしが此事を聞て五

日畑を立て其夜は鏡に野陳を取て翌日水島にて合戦を

松浦散々に打負て杉浦に引取り船より平戸に帰る。元禄

圖に松浦郡波多島村あり唐津より二三里南にして鏡唐

津などより長崎にゆく道筋なり嶋にもあらぬぞ壹岐島日高家譜に

肥前國唐津岸嶽城主波多参河守家臣日高大和守資天文弘治之比為大老職此時有三家老日高大和守之嫡子日高

甲斐守喜。右浦中務。川添播磨守。是也城主三河守卒而無男子此時依養子之事大臣不和参河守時信之後室新芳毒殺

日高大和守甲斐守大怒之於是養子之談不成新芳与日高家中二分而争戦不断永禄十二年十二月歳暮夜甲斐守戦

負遂下岸嶽城云云

○呼子（ヨブコ）

海東諸國記に肥前州源義乙酉年遣使来朝書称呼子一岐

守源義約歳遣一二船小二殿管下居呼子有麾下兵称呼子

殿。同書一岐島件に志佐佐志呼子鴨打分治云云小干卿呼子代

官源實主之約歳遣一船書称上松浦呼子一岐州代官牧山

帯刀源實庚寅年源實子正遣使来朝書称去歳六月父為官

軍先鋒而死干歓臣継家業乃依父例館待云云時曰羅（シリラ）卿呼

子鴨打分治。各有代官郎可五豆卿呼鴨打分治。各有代官。圖

書編五十巻日本國序に肥前州雄婆哥（ヨブコ）同書肥前図に継婆哥などあり呼

子は与夫古と訓べし。名義はまだ詳ならねど、呼子鳥などの多き處に

て負せつるにもあらぬか　さて野宮千首和哥に明教法師

名に立る呼子、山の呼子鳥早なき出ぬ春来ぬりとて

名所小鏡に肥前國呼子と云處あり此浦里の向に島あり
社もあり望夫石とて佐夜姫渡唐の船をしたひし大臣の石
（落字有り）と成て御座なり呼子と此島の中間十町ばかりあり
なりど見えたり（元禄図に松浦郡呼子村あり）又松浦古来略傳記に呼子九
郎源早光呼子村百石又呼子宗五郎源清保海路記に松浦
呼子は日本第一の湊なり上下の舟東西の風に出帆する
何の湊よりも勝れたり呼子上の松山は秀吉公朝鮮征伐
の時築給ひたる名子屋の城址なり名子屋と呼子との間
海上半里陸路二里余ありなどと見えたり（船がゝての事は松浦郡件の）
（細注に云てさて此所より呼子礒とて出る名産なり筑前などよりも多く来たるされども目のあらき石にてわろき）

（又物をとゞめて用ひがたし）
○袖ノ湊
夫木集に有家卿のうた
松浦ノ浮袖ノ湊にこき寄む唐土舟のとまりもとめて
童蒙抄に大伴ノ佐手彦任那ノ國を鎮め兼て百濟國を救しむ
が為に詔を承て此村に至て篠原村ノ乙姫を妻とした云云佐
手彦舟を出して去る日乙姫袖を持て振招く此故に袖振
湊と云。又源氏物語花鳥餘情に落窪ノ物語を引て今はとて
島漕離れ行舟も褶振袖を見れで悲きとあり今も肥前の海畔ノ
男女等旅客ノ舟の湊を出る時に衣服あるは船ノ苫などを持

て行舟の隠れしまで拘ふ事あり蓋此遺風なりと見えたり。さ
て此湊は褶振山麓にして玉島河粟河等の川尻と聞ゆ　古は
粟川の水唐津城の二ノ丸の辺をへて海に入りてとりふさ
ること秀吉公今の唐津城を作て給へる時水島と今の本丸
との間をくりぬきて此ノ方に直く水を流して昔の川尻の
方に二ノ丸をつくり玉へりしより唐津城はそこしの山
を本丸にとりこえて此海に作て出して四方凡て石垣を
高く築上たれば東西又北の海上などよりみゆるにえもいは
れぬ美き城なりと

○鴨打（カモウチ）

海東諸國記に源永丙子年遣使来朝書称肥前州上松浦鴨
打源永受圖書約歳遣一二船小二殿管下居鴨打有麾下兵
称鴨打殿同書に一岐島志佐佐志呼子鴨打分治云云無山
都御鴨打代官主之時曰羅御呼子鴨打分治各有代官郎可
五豆御呼子鴨打分治各有代官とあり。鴨打は加毛知とよ
むべし。名義はまづ考へぞとし水鳥の鴨に由あまて見せさるにや　さて松浦
古来略傳記に鴨打新三郎平周慶下平野村二百石。同中四
郎平周利。同村百石。鴨打道可相覚とみえたり。さて元禄圖
を按ずるに鴨打と云地名はみえしぞとし文字のなかびな
どにやとも思ひなりしかどこの書にもかしこの畑
ミちも正しく鴨打と書ともなかひにもあらじ一村の内
の小名などと委く尋てば今も鴨打と唱ふる地の有むも
しるべし

○九沙島

海東諸國記に藤源次郎丙子年遣使来朝書称肥前州上松浦九沙島主藤源次郎約歳遣一船とあり。九沙は久佐とよむべし草の意か。なほよく考ふべし　又同書に義永丙子年遣使来朝書称肥前州上松浦九沙島主藤原朝臣筑後守義永受圖書約歳遣一舡とあり。さて草島など云地名今あることなし因て思ふに沙は路の誤りにて黒島にぞありぬ。黒島は平戸領にあり又上松浦に草尾村と云もあれど(草當村と云もあり)島を尾の誤にてもあらむか。なほなほよく考ふべし　又路程全図を按ずるに相浦、牛ノ浦、牛ヶ首など云處の海に九十九島とて小き島どもあまた見ゆれど是にもあらじ黒島と云はその沖のかたにあり

○寶泉寺

海東諸國記に源祐位丁丑年遣使来朝書称肥前州上松浦那護野寶泉寺源祐位約歳遣一船僧居寶泉寺とあり。寶泉寺の事いまだ考へねど。其比名護屋にありし寺の名とは聞えたり僧にして源姓などをつけるはめづらし　もとより清躰の僧にてあらざるべし。或人云塩鶴村より二里斗南の方に畠津、是に宝泉寺とてあるこれにてもあらむといへりき　に依て按ずるに下に塩津留松林院主源重實とあるも僧なるべし

○佐志

東鑑四十巻に建長二年三月一日閑院造営雑掌築地一本

佐志源次海東諸國記ニ源次郎巳丑年遣使来朝書称肥前州上松浦佐志源次郎受圖書約歳遣一船小二殿管下鮎武才有麾下兵称佐志殿とあり又同書（一岐島件）ニ志佐佐志呼子鴨打塩津留分治ト云加愁卿佐志代官主之松浦古来略傳記ニ米倉新七郎源和秀佐志将監五代孫也とあり元禄圖ニ松浦郡佐志村ありさて次ニ挙たる志佐も似られる名なるが佐志といひ志佐と云へるなどいかゞなる由ありて負せるも考へがたし

志佐

海東諸國記ニ源義乙亥年遣使来朝書称肥前州下松浦一岐州太守志佐源義約歳遣一二船小二殿管下鮎武才有麾下兵称志佐殿同書（一岐島件）ニ志佐佐志呼子鴨打塩津留分治ト云唯多只卿志佐代官源武主之戊子年受圖書約歳遣一二船書称一岐守護代官真弓兵部少輔源武とあり元禄圖を按ずるに松浦郡志佐村あり（宮崎宮古文書ニ八幡宮神領壹岐島瀬戸椙原両村事）松浦小豆弥五郎大島三郎左衛門尉町田平三巳下輩抜押妨狼藉之為事實者大招咎欤所詮厳密退非妨人等可沙汰村万地於雑掌文可問□志儀之状如件観應二年十二月廿一日在判松浦志佐左近将監殿とあり是も海東諸国記ニ見えたる志佐氏の先祖なるべし

○田平

海東諸國記ニ少弼弘丁巳年遣使来朝書称肥前州田平寓

鎮源朝臣弾正少弼約歳遣一二船有竈下兵とあり田平は多比良とよむべし名義は平田の意ゟ（又さしでたる土地のゐひうゝなる所にても有べし）さて海路記に松浦郡田平は應安の比より天文の比まで松浦家臣田平豊後と云者城を造て居たりし處なりと云（又太平記に田平左衛門藏人と云れし也。又柳園随筆に信太小太郎が姉の道の記と云ものに田平弥勒寺云云と見しゐうしなり委くは弥勒寺の件に引出ていふべし）日本輿地圖に松浦郡田平は平戸島より海を隔て東（陸地）にあり立花よりは北三粟屋よりは西に當れり（海路記に田平の海辺の人家を日浦と云とあり日本道中細見記にも田平松浦のやしき有りと記して日浦といひ處あがいて見ゆれど此ふたを路程ののでつじめ甚こじりかゐるそのなれむ此方いひがことゐるべし）元禄圖に松浦郡田平村あり

○耶久野（ナゴヤ）

海東諸國記に藤原頼永丙戌年遣壽藺書記来朝書称肥前州上松浦耶久野藤原頼永壽藺受書契礼物傳于國王事見上山城州細川勝氏居耶久野（是より初に那護野とあり其文は宝泉寺の件に引て）武備志二百三十九巻（朝鮮考）に云云冊使得渡海朝鮮陪臣從秀吉責朝鮮王子不親謝及期引使者入見方亨前立惟敬捧印立階下良久忽殿上黄帷開一老叟曳杖挾二青衣而出即関白秀吉也侍衛呼噪二使匍伏老叟頤加詬讓行長曰此天朝送礼人宜優待之始出就館次日宴冊使惟敬方発言撤兵通好秀吉即怒曰天朝遣使封我我不敢辞朝鮮決不許和天

使亦不須久留詰朝可即発我當再征朝鮮耳二使行至郎古耶将渡海倭酋賫秀吉書來二使謂謝表也発之乃撒責朝鮮列其三罪至釜山釜山倭営尚弱朝鮮李元翼欲衆虚撃之惟敬不可乃私市珍異為秀吉貢物以詭報而倭兵陸續渡海以行長清正與哥義弘将朝鮮避兵顛越本朝復議出師而兵已盡撤。募者不至乃下石星於理時倭兵二十餘万分五路而入不復掠財嗜殺唯據險守城為久遠設施第歛本国糧朝鮮而朝鮮久遭兵燹公私無儲野谷未蓄故倭亦待秋而進云云 徴毖

録ニ云云又使沉惟敬往諭倭令渡海又使徐一貫謝用梓入那古耶見関白武備志巻二百二十三日本国図ニ自護屋一百六十里海至壹岐壹岐一百六十里海至對馬自對馬二百一十里至朝鮮西地登叫図書編五十巻日本国図ニ肥前州

南哥呀 松浦傳記に名古屋和泉守菅原仲秀名古屋二百石。豊臣勝俊朝臣九州道の記に其日なごやに至りて草枕結び定むるなどもまくらぬにかしこき一声おとづれて過りれを

かくしきくは初音聞にはなくさうるて出し故郷なりけり

忘きぬ。松下氏云名護屋在肥前國松浦郡此地為波多三河守之所領秀吉就之造宮殿などあり。那久野又那護野郎古耶ハ郎那の誤のしまに奈碁也とよむべし。名義耶古ハ長の意なるべし

仲哀天皇紀に名籠屋大濟とある所も長くさし出たる處を云へるも其事は筑前志五巻十一丁に委く云るを考ふべし

さて海路記に肥前名護屋の地景は崛曲自然に興有て

百町余海水めぐり入て四方の風にも浪なければ深き事志
るべかりしば。秀吉公名護屋に在陣し給ふ時唐使此地の風
景を賞して風帆藻に載たるに

重疊青山湖水長。無辺緑樹顕新粧。遠来日本傳明詔。遥
出大唐報聖光。水碧沙平迎日影。雨微煙暗送斜陽。白頭
千態皆湘景。不覚斯身在異郷。

杳旋軺車来日東。聖君恩重配天公。遍朝万國播恩化。悉
撫四夷助毛忠。名護風光驚旅眼。肥州絶境慰衰躬。洞庭
何及比清景。空使詩人吟策窮

一奉皇恩撫八紘。忽蒙聖諭九夷清。晴光湧昊景蹤聚。山
勢抱口煙浪軽。處境奇蹤難闘靡。揚州風物寧堪争。扶桑
聞説石仙鳥。斯處定知蓬又瀛。

柳園随筆に松浦郡呼子の上の松山是秀吉公朝鮮征伐の
時築給ひたる名護屋ノ城なり今なほ石壁あり唐津の殿よ
り番所を置て城ノ趾を守らせらる此處の海門絶景の地之

同書に凡諸國に船人の湊多しといへども肥前名護屋の
如く舟をつなぐに便よろしきはなしといふ沖方に壁島
ふさがりて其間わづかに四五町に過ずといへども海ふ
かくして大舟をつなぐに難なし海口東と北とに二所あ
りて東より入る舟は西北の口より出で西北の口より入
る舟は東の口より出て初入りたる口にかへることなし村
里甚にぎはひて伊万里の陶器をうる家多し長崎をくだ
め平戸五島より肥後薩摩等に通ふ上がりの舟いづれも此
湊にかゝらぬはなし大閤軍船を此所につなぎ給へりし
もうべなり此壁島の北ノ沖は即壹岐ノ島なり呼子湊より

七里ありといふとえしあるある人いふ名護屋城趾の石今は多く残らじ是は寺沢志摩守唐津城をつくる時に多く名護屋の石をとりしといへり。幸テ呂云名古屋大閤御陣屋の跡三町許と見ゆ其外諸大名の陣所と云もあり石垣なとは何れも崩されども西の御門と云なかに石も多く残れり石垣高さ二丈余斗のものなり是は加藤清正のつけるなりと云御館のあとは小高き所にて一丁斗あり

○弥勒寺

類聚三代格今本に應令常住肥前國松浦郡弥勒寺識僧五人事。右得太宰府解偁。觀音寺講師傳燈大法師位充豊牒偁依太政官去天平十七年十月十二日牒勅旨件寺始置僧廿口施入水田廿町自尔已来年代遥遠緇徒死盡田寺空存修跡絶望請置度者五人令修治彼寺即鎮國家兼敷遊靈者府依牒状謹請官裁者右大臣宣宣選心行無變精進不倦堪住持佛法鎮護國家人僧以令常住とあり。今按するに松浦郡弥勒寺は田平と云所にあり。海路記に田平は田浦上の在郷をいふ海辺の人家を日ノ浦と云云云此處に弥勒寺と云禪院あり信太小太郎が残したる石にて庭前に苔むしたる石なり信太ノ小太郎を尋らるゝ道ノ記に田平ノ弥勒寺とあるは是なりとえしあり此寺の事今一際委しく考へて記置まほしきわざになむ

○佐里村

東鑑三十六巻に寛元三年十二月云云肥前國松浦庄西郷

内佐里村壹岐泊牛牧等相論事云云とあり（全文ハ此巻の初に引出せり）
佐里ハ差利とよむべし。名義ハまづ考へがてし（哉の意にてもあるか）
さて松浦傳記に土岐伊賀守橘但佐左里館二百石。江里長門守藤原夫相左里村館三百五十石とあり。又元禄圖に松浦郡佐里村あり（岐志嶽の南にあり大村なり）

〇壹岐泊（イキノトマリ）

東鑑三十六巻に寛元三年十二月云云肥前國松浦庄西郷内佐里村壹岐泊牛牧云云とあり壹岐泊ハ伊支等麻理とよむべし。名義ハ壹岐島人の常に来りて舟を泊る處にて負せたるべし（諸國に京泊と云所のあると同じ例なり）さて此壹岐泊今ハ詳ならず元禄圖などにも壹岐泊といふハ見えずてとし伊伎佐の誤りとも思ひたりしかどなほさるをあるまじ（又思ふに佐里村の内に伊岐泊と云所ありて其所に牛牧をおきたることのあるにや）

〇草野大村

名處方角抄に肥前國玉島河皇后の金魚釣玉ふ河なりあがり給ふ石今に是有此石より三町ばかりハ今も鮎をつるなり此河ハ草野の大村といふ處なりとあり。草野ハ久佐乃とよむべし。大村ハ於保牟良とよむべし。さて草野の名義ハ鏡神社の神官草野氏の草野の移れるときこゆ。東鑑六巻に文治二年十二月十日肥前國鏡社宮司職事以草

野次郎大夫永平被定補是旦被優奉公労云云　筑後地鑑よ尋草野系図
里老曰其先奥州栗屋川城主安倍宗任配流肥前松浦郡其
末葉頼朝公於筑後賜山本御井御原之内三千町城于草野
庄吉木村故号草野太郎永平　太平記三十三巻筑後大原合戦件松浦黨よ
い云云草野筑後守子息肥後守。天正十二年三月草野氏（中務少輔家久）筑
前原田が後詰として畑三河守と合戦なること軍記よ見
えたり。写本九州軍記十一巻よ天正十四年二月肥前國士
竜造寺己下秀吉公よ内通の使を上せたるよ使者帰國の
節諸士よ下さるる内書文章は皆同じ事よて名のかはる斗
也中よも草野よ給はる御書よ為一礼差上水崎和泉殊太
刀一腰馬一疋到来悦思召候抑島津御退治之事毛利右馬
頭雖被仰付候始羽紫備前少将羽紫中納言其外追々被差
遣人數候為九州見物殿下三月一日被御動座候然者十日
廿日之間之儀候条無卒尓之儀堅固之備尤候彼逆徒等悉
可被刎首候間各依忠節色可被成御褒美候尚黒田勘解由
可申候也二月十八日草野中務少輔殿。秀吉書判。扶桑紀五
巻よ肥前玉島河の北の山下よ里あり草野大村といふ此
里よてすく紙を草野紙といふ玉島の南北よ民家少しあ
て此所は南村とて玉島の南よある村よつゞりとあり。大
村は土地の廣きなどよて負せさるべし。さて柳園随筆よ
筑後國住人草野次郎鏡宮社司よ補して松浦よ来領を其

子孫天正の比に家絶たり。軍物語などに松浦草野と連ハふハ是なり此草野家の城趾ハ玉島河の艮方の山頂にありて其處廣平にして段々となる上城下城等の名今もあり此山の南麓玉島の里に向ひたる人家を五段田といふ近比に此里より石墎を堀出せしに中に三人の骨ありしといふ草野氏の先塋なるべし此外玉島里の北入口の山下に古墳のありしを平原村（南山村）の功岳寺と云（禅寺）に移せり此寺草野氏代々の菩提寺にして其位碑等今にありと見えたり。九函圖を按ずるに玉島河のかたより大村平原など處に挙たり

○三栗野

海東諸國記に丁亥年遣使來朝。書称肥前州下松浦三栗野太守源朝紂歳遣一船小二殿管下有麾下兵居三栗野。太平記三十三巻筑後大原合戦件に三栗屋十郎とあり。三栗野ハ義久里也とよむべし。名義ハ御厨の意なるべきか。（今ハ御厨とも書くなり）さて松浦古来略傳記に三栗屋津守無足五人足軽廿人。又三栗伊勢松源亮信。海路記に（松浦三栗屋件）常に舟がゝりするる處を美來屋（ミキヤ）の星賀（ホシカ）といふなるの山を竹崎山といふ又ハ城山ともいふ古城あり永録の末天文の比まではミ來（ミキ）屋丹後と云者居城せしなる由なり美来屋より今万里に海

陸七里同書に高島と云ハこくりやの内を口の星賀に出さとだ左方の島の惣名をいふ殿浦といふ湊のうかの山ハ古城山なり城主志れざもしれぬしあり此高島ハ唐津の沖高島とは別なり武備志又圖書編の肥前件にを迷古里とあり是ハ屋をとドをそふきて書るなり。又かりふに日本輿地圖に田平の北に古里より迷古里ハ是にてもあるらむか。九州圖を按ずるに三栗屋ハ日浦の東志佐の西にあり

○塩津留

海東諸國記に一岐島云云志佐佐志呼子鴨打塩津留分治云云古仇音夫卿源経主之己丑年受圖書約歳遣一二船書称上松浦塩津留助次郎源経とあり塩津留ハ志保都流とうむべし。名義ハ塩ハ潮のさし来る處なとよりて負せつるべし津留ハ田畠の廣き處をさしていへる九州の方言なり宇佐大鏡なとにて多く見えたりさて此塩津留ハ元禄圖に松浦郡塩竈村ありさて此塩竈今ハ一村の名なれど中比ハ廣き名にてもありしにや下に引出せる松林院重實観音寺宗殊らもみこの内にあてなからの國人にたづぬべし

○松林院

海東諸國記に源重實丁丑年約歳遣一船書称上松浦塩津留松林院主源重實とあり。松林院いまだ考へず。寺号とも聞え多るなりされども源重實とあるハ正しく僧名にも

あしぞなかうく考ふべし その比ハ僧はあしぞとも寺院などをうけもてる事もありし
すや心得ぢし

◎観音寺

海東諸國記に一岐島云云宗殊己卯年遣使来朝書称一岐州上松浦塩津留観音寺宗殊約歳遣一船とあり観音寺ハまづ詳ならじ 上にいふ松林院主とあれども主の字のあるできと落しこしにやさて此宗殊とハい僧の名なるにや姓をそへていはざるかいさしか殊なる書ざまのことくいかもするこいかの國人に問明らめてかうはてもあるべし

◎五龍山

元史二百八巻日本傳に至元十八年正月命日本行省右（左カ）丞相阿剌罕右丞范文虎及忻都洪茶丘等率十万人征日本二月諸将陛辞又為風水不使再議定會於一岐島今年三月有日本船為風水漂至者令其水工畫地圖因見近太宰府西有平戸島者周圍皆水可屯軍船六月阿剌罕以病不能行命阿塔海代総軍事八月諸将未見敵喪全師以還乃言至日本欲攻太宰府暴風破舟猶欲議戦万戸厲徳彪招討王國佐水手総管陸文政等不聴節制輙逃去本省載餘軍至合浦散遣還郷里未幾敗卒于閭晩帰言官軍六月入海七月至平壷島移五龍山八月一日風破船五日文虎等諸将各自擇堅好船棄之棄士卒十餘万于山下云云十万之衆得還者三人耳 此文ハ六ノ巻十

一丁平戸島ノ件ニ委くひきいづべし　圖書編五十巻日本國ノ件ニ元ノ至元ノ初遣
使招諭不至因令使由高麗且令高麗王植致書諭意皆不報
至十七年春二月顧殺國使杜世忠等世祖怒於是召范文虎
議招募士卒伐之踰年遂率兵十万以往至五龍山暴風破舟
文虎等擇好舟乗走棄餘聚山下衆推張百戸為主将伐木造
舟會倭来戦盡殲焉逃帰者纔三人終元之世使竟不至。同巻
ニ云云元兵至五龍山大風破舟然范文虎猶擇得堅好者乗
以遯使能盡護破舟奔山之人不自相争猶可一戦以俟伐木
造艫而相棄如仇莽無約束遂致被虜倶殲同葬鯨穴可恨哉
云。同書日本國考ニ臣聞元世祖曽以舟師討倭致弱十万衆

於五龍山下談者恒以為口實。武備志二百三十巻ニ唐咸亨ノ
初号日本元ノ世祖使趙良弼招之不至遣唆都范文虎将十万
兵往征至五龍山暴風舟覆軍盡没終元世絶不通。関東許定
傳ニ弘安四年七月大元賊徒自宋朝高麗數千艘寄来數日
漂海上而後群集肥前國鷹島之處同廿日夜翌日閏七月一
日大風賊船悉漂洲破壊海陸之間。など見えたり。又八幡愚
童訓ニ文永十一年九月の比異賊四百五十艘の大船ニ三
万人乗て寄来たるニ云云其後又弘安四年の夏蒙古大唐高
麗已下の國々共の兵駈具て三千余艘大船ニ數千万人乗
つれてこそ来たりけれ云云九國の兵さでるニ度々の合戦

に及び関東よりの武士は何々手並の程を見給へかしと進みきて城ノ次郎が手ノ者新左近十郎今井彦次郎財部九郎伯父甥押寄て散々に戦ひ命を限りと討死して失にけり其後遥に息ひて鷹島へこそ引退きけれと云さる程に十日餘の比西國の早馬討て申けるは去六月晦夜半より乾風震吹て同七月一日賊船悉く漂倒して海に沈畢ぬ大将軍の船は風已前に青龍海より頭を指出て硫黄の香虚空に満て異類異形の物ども眼に遮けるに恐れて逃去ぬ残る所の船どもは打破られて礒に上て息に漂ふ海面は筏を散たるに異ならず死人多く重なりて山を築くに相似たり

云云鷹島に打上ぬる異賊數千人なりしとも見えて鷹島則五龍山なり 此事大平記三十九巻にも見ゆれど鷹島とも五竜山とも記せることなし 此鷹島は松浦郡唐津の北なる高島の事ときこゆ 上にもいへる三栗屋の海なる高島とは別なり。されども海路記に五竜山は志志伎山の事なりといへるともえしられど唐津の高島にてあらじとも思ふべけれど元史八幡愚童訓等の説によられど志志伎山の辺のことときこえたれば又五龍山は筑前國志广郡肥海島の事なるべしとおぼゆるよし由もあれどもそでよ筑前志一巻にも引出て論へて其らけを聊いもじ八幡愚童訓筥崎ノ宮ノ件に蒼海遥に見渡せど多可・野古・志賀・三島の浮出たると云とあるも見なり蒙古襲来の事は筑前志一巻・肥前志三巻・壹岐志上巻・對馬志上巻にも引出てあげつらへるをかむりくあはれべし此島唐津より一里北の海中にありていとしくそぞどうて人家あり 扶桑紀勝に高島は加唐島の東一里許にあり大島にして山又高しと元史に書る五竜山是なるべし 圖に鷹嶋

長十一町横四町といへり

○法麻殺几

圖書編五十巻（日本国図）に肥前州法麻殺几あり。是今の濱崎駅なり。筑前國怡土郡よりの入口にして海濱なり玉島より廿町許北にあり是より西唐津城に二里あり此間に二里松原とも虹松原とも云小處あり此松原内に長崎に行道と唐津に行道との街あり（唐津にゆくには西をさしてゆくに松原の西の際に水島と云町あり是より唐津に舟渡あり川もはゞ百余間あるべし此水島と唐津城の本丸との間古はつゞきてありしを城を造る時に掘めさうるとのなりといふ水島より唐津に渡らむとする渡口に唐津の殿より番所をかまへられたりこの川の事は鏡渡の件又袖湊の件どもよく論へるを考ふべし）

世子

圖書編五十巻（日本國序）に肥前州世子あり。世子は志都とよむべし（世の唐韻シなり其例は同書に筑前志加を世加。肥後川尻を開懐世利。同国八代を耶子世禄。とある類なり）子を都とよむも唐韻なり（同書に肥前松浦を馬子喇。と薩摩肝属を記麻子記。とある類なり）名義はまづ考へず。さて海路記に肥前相浦のならびに志づの浦としてあり信田小太郎を尋らるゝ姉君の道記に相浦志づの里とあるは此所なり俗にシツヽと云大崎に信田殿屋敷とて廣きやしき跡あり彼大崎にも文禄の比一部式部と云者居城して九島主なりしが其後大崎氏を改て筑前に至て吉田家臣となる由なりと見えたり（常足いまだ信田冊子を見ず）

愛奴乎喇

圖書編五十巻日本国ノ序よ肥前州愛奴乎喇あり愛奴乎喇ハ阿比能宇良とよむべし相浦とかくなりうるを相を後世よアイと唱ふるまゝよ愛字を書るなりチハテゥ字ゥの誤なるべし又ハ乎ノ字唐韻ゥよてもあるゥコとウとハ声相近し名義いまだ考へず・さて九州圖又道中行程細見記等よ松浦郡相浦あり海路記よ相浦らいハ一里餘の入海なり相浦の入口よ大崎と云處あり同じなりびよ志づの浦とてありと云とある細見記よ北より南よ打つゞきてクス浦・日浦・サセナ・相ウラ・牛が首・とつゞれあげあり日本輿地図よ九サウ泊と牛が首との間よ大なる入海ありこれ相浦の入海ときこえたり元禄圖よ松浦郡相神浦村あり又隱德太平記九巻よ肥前国松浦丹後守政ハ肥前守與信の為よハ一門なりけれども年来不和なりしを相神浦有田今福山代を領じて大智菴よ居城せり政ハ天文七年三月崎辺と云所よて関狩せられし時鹿一足政ヶ前を通るを家人山田四郎右衛門追様よ射留たりけきを大よ怒て山田を追出しけるを山田兄弟與信よらしめて相神浦よ出陳せしむ故よ與信天文九年八月二日大野源五郎定文を大将として南入道宗智西玄蕃加藤左馬其外近藤一部篭手田小佐々田平等三百余騎子ノ刻計りよ大智菴よ押寄火を放て城中の不意をうつ城兵残らず落失けれ政ハ腹切て死けれ内室光よ嫡子幸松丸五歳なるを生捕て平戸よ社ハ帰りけれがくて幸松丸を河内村よおく興信家臣一部籠手田ハ幸松丸を誅して後患を防べき由興信よいひし幸松丸此事を聞て有田よ在ける庄山池田両人と計て十一月十五日氏神まゐる歳ノ宮参詣よ群集よまぎらして幸松丸を落そ幸松丸ハやがて有田ノ唐船ノ城よ籠て其後相神浦飯盛ノ城よううつらせける是幸松丸十五歳の時の事也外記局日記二巻其文多不載只取其大綱太宰府解申請官裁事・言上大唐呉越船来著肥前國松浦郡柏島状・舶壹艘勝載参件解乗人壹佰人史名在別一船頭

蒋裏二船頭人前仁秀三船頭張遇右得管肥前國今月十一日解同日到来你管高来郡肥最埼警固所今月五日解状同月十日亥刻到来云今月四日三尅件船飛帆自南海俄走来警調兵士等以十三艘追船留肥最埼港島浦爰五日寅一刻所司差使者問所送牒状云大唐先越船今月四日到岸状請准例速差人船引路至鴻臚所牒者愷加實撿所申有實仍副被牒状言上如件者云云裏申送云以去三月五日治離本王之岸久漂滄海云云天慶八年六月廿五日

太宰管内志　肥前之五

国立公文書館
National Archives of Japan